


「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2015」 訪中プログラム感想文



 公益財団法人日本科学協会
国際交流チーム

目 次

滋賀県立大学大学院 環境科学研究科近江環人地域再生学コース一回生 宮永幸則	2
筑波大学 大学院システム情報工学研究科 博士前期課程 讚井知	3
公益財団法人 ツーリズムおおいた 安部佑美	3
慶應義塾大学文学部 2年 皆川真裕子	4
東京外国語大学 国際社会学部 2年 吉崎晴香	5
滋賀県立大学人間文化学部・地域文化学科 3年 古川裕樹	6
学校法人名古屋石田学園 星城大学学修支援課 職員 山本勝巳	7
東北大学 文学部中国文学 2年 木村麻莉子	7
創価大学経済学部（通信教育部）4年 村上恵理	7
岩手県立不来方高等学校 普通科外国語学系中国語コース 2年 松坂茉留	8
日中学院 山崎顕吾	8
東京外国語大学国際社会学部 2年 鈴木洋晶	8
中国美術学院書法系書法篆刻專業本科卒業 露木春那	9

最愛の隣人・中国と、相互理解を深める友愛のこころ



一週間の日程で中国を訪問することができ、とても貴重な経験をする事ができた。渡航前、連日のように報道されていた北京の大気汚染は想像以上に深刻だった。青空の日は一日もなく、毎日スモッグに包まれた灰色世界で、滞在四日目にはのどに異変を感じるようになった。11月はマスクをしても鼻をかんだら真っ黒だったそうで、10メートル先が霞んで見えなかったという。「高度経済成長期、1960年代の日本と同じ問題がたくさん起きている」ということで、経済成長優先の資本主義経済を突っ走る中国の躍動感と歪みを肌で感じる機会になった。まちは経済成長の象徴である高級外国車が溢れかえっていたが、一方で都市(北京市)と農村(山東省曲阜市)では、経済格差や所得格差、教育格差が確実に広がっていることを感じた。大卒の就職率は30%前後で、上位国立大でも就職がとても難しいとのこと。政府は大学生の起業を奨励しているが、経営についての実体験や知識を学べる場所が少なく、中国は詰め込み型の知識教育を優先していることもあり、実情はうまくいっていないとのことだった。

今回交流した北京人民大学の学生たちも、さまざまな悩みや不安を抱えていた。大卒の初任給は月6万円で、北京の物価は高騰し続けているので、若者の生活は苦しいようだ。物価は日本とほとんど変わらなくなってきている。しかし、北京で切磋琢磨して働かないと落ちこぼれてしまう。大学生の自殺など、行き詰まりも見えてきており、少子高齢化などの課題を抱えている。日中両国が連携しながら、環境問題や社会問題の解決に向けて行動することの必要性を実感した。

中でも印象に残っている言葉が「中国人にとって、一番身近な国は韓国でもアメリカでもない。日本だ」ということ。日本の文化や経済を学ぼうとする姿勢を感じた。日本への理解を深めようとしている学生も多いという。私たち日本人は、中国のことについてどれほど知っているだろうか。「近くて遠い国」なのではなく、きちんと向き合う姿勢が大切であるということを改めて深く考えるきっかけとなった。

中国人民大学の学生たちと行った盧溝橋、抗日戦争記念館。自分が「日本人であること」を強く認識し、改めて歴史問題に対する知識にかけていることを感じた。しっかりと学ばなければいけない問題である。孔子のふるさと曲阜市、曲阜師範大学、万里の長城、天安門広場。普通の旅行では体験できない貴重な出会いと心の通う交流をすることができ、出会った中国の人たちはみんな優しい方ばかりだった。「反日感情を持つ人が多い」と聞いていたので、怯えた心で訪れた中国で、価値観が変わるほどのカルチャーショックを感じた。

百聞は一見にしかず。歴史を直視しながらも互いを尊重し、学び合う友愛の精神を大切にしたいと思う。若い世代がしっかりと知識と交流を行い、日中交流の架け橋となれるように努力を続けていきたいと思う。今回、貴重な研修の場を提供して下さった人民中国雑誌社、日本科学協会、中国外文局の皆様に、改めて心から感謝申し上げます。



初めての訪中から帰国し約一ヶ月経った今、中国での思い出は絵画のように静かさと神秘さを湛えて私の心に張り付いている。

訪中前より、中国は人口が多いために多様な価値観があり、きっとそれが様々な局面において反映されているであろうことは想像していたが、

私の目に映った中国においてそれらは互いに対立することなく温かみをもって繋がっている印象を持った。

国の違い、地方の違い、家庭の違い等の「切り口」が設けられれば当然価値観や文化は異なるだろう。

しかし、それは出会いと対話を繰り返すことで常に変化し続け、融合したり独自性を獲得する。そしてその過程において、人々が心の中に本来共通に持つ、愛や平和、発展を願う心が触れ合うことが出来れば、人は幸せを感じることが出来るのではないだろうか。

中国はこうした心があらゆる所で豊かに表現されており、それが私に「温かく」「美しい」国だという印象を残したのだと思う。

帰国して日本の地を踏んだ時に、少しどこかほっとする気持ちと共に、「今を生きる学生として何をすべきか。」という責任感がふと私の中に沸き起こった。

招待旅行中は自由時間がほぼない程内容が充実しており、さらに毎日想像を超えるおもてなしをしていただき夢の様な経験をさせていただいた。このような機会でないとお会いできないような方々との晚餐会や現地の大学生とのディスカッションの日々は毎日が新しい発見と出会いの連続で、このような貴重な機会を提供して下さった関係者の方々が私たちに抱いてくださっている期待を大変強く感じのだ。

私は、普段よりよい社会の仕組みを作るためにどのようにしたらよいのかを公共政策の立場から研究をしている。

脳裏に強く印象づけられた温かい心が溢れる美しい中国の景色から、人の温かみを持った社会の発展を目指すためにどのようにしたらよいのかを考えつつ、私の出来る限りの方法で社会に貢献することをお約束し、作文を書くきっかけをくださった皆様そして、今回運営に関わられた、全ての方への御礼の言葉としたい。

公益財団法人 ツーリズムおおいた 安部佑美

新たな架け橋



本当に多くの人に出会い、暖かな思い出がたくさん詰まった旅となった。

初日に訪問した人民大学では、今度に日本に留学するという学生に出会った。二人で盧溝橋を渡り、日本で再会する約束をした。また、家庭訪問先の人民中国の社員の方のお宅では、手料理をごちそうになったりした。書齋でふとその方が「日中交流は私のライフワーク」とおっしゃったことがとても印象的だった。

今回の訪中で、日本に関わる戦後から今日までの多くの中国人の思いに触れたこと、また中国と関わる日本人の仲間に出会えたことで、日中間の未来に対して「今は様々な問題があるとしても、互いを理解し関係を深めて行く道が必ずある」ということを実感することができた。

また、整備された北京の街や高速鉄道といった、中国の新しい一面を見て驚いた一方、山東省の面影

が残る街で、深淵な孔子の思想の一端に触れることができた。講義して下さった先生の言葉は少し重く、美しく教室に響いていた。中国のことはよく知っているつもりだったのに、「こんなにも多面的で、複雑で、面白い国だったんだ」と改めて気づかされた。言語にしる、文化にしる、中国には何か形容しがたい豊かさがあるように思う。日本の若い世代だけでなく多くの人から中国に対する関心が薄れていくのは、勿体ないことなのではないだろうか。

一言に中国と日本の交流と言っても、一人一人の多様な交流で成り立っている。私もこれから、仕事の上だけでなく、生涯中国の人たちと心の交流を続けていきたいと思う。また、日本人と中国を繋ぐことも考えていこうと思う。

日本と中国の歴史にも向き合いながら、国境も民族も超える『新しい橋』を架けていきたい。それが愚かな戦争の歴史を繰り返さないためにも必要なことだと感じている。

慶應義塾大学文学部 2年 皆川真裕子

研修旅行で得たもの



中国の旅は、私に多くのことを教えてくれた。今回の旅で知ったことは大きく二つある。ひとつは、もちろん中国のことだ。私は今まで中国を訪れたことはなく、中国人と交流したこともほぼなく、ましてや中国語を勉強したことも一切なかった。そのような意味で、今回の研修旅行参加者では珍しかったかもしれない。中国に関して無知に等しい私にとって、中国のイメージはメディアによるものがほとんどを占めていた。空気がとても汚い国、領土問題で日本と揉めている国、日本のことが嫌いな国、といったネガティブなイメージを抱いていた。しかし、今回の研修旅行でそのイメージは大きく変えられた。中国は必ずしも反日的ではなく、親日的な人も多くいる。十三億人もいる中国には様々な考えの人がいて、反日的な人もいれば親日的な人がいるというのは、当たり前のことだが、そのことを実感として得られるまで気づかなかった。中でも、日本の文化が中国でとても親しまれていることに驚いた。現在放送されているドラマがとても流行しているらしく、観ている人が多くいた。また、仲良くなった人の中には、漫画やアニメに関してとても詳しく、私が全く知らないような内容を、深く幅広く知っている人もいた。

政治的には中国は日本と衝突しているが、文化的に見れば中国は日本に親しみがある。ソフトパワーという言葉があるが、政治でなく文化の面から、日中関係を改善していくことはできるのではないかと強く感じた。

「服を買いに行く服がない」という言葉があるが、今に私はまさにその状態で「中国についてよく知るための中国の基本知識を知らない」状態である。研修旅行を通じて、中国を肌で感じることができ、中国についてもっと知り、交流し、日中関係をよくするために何らかの形で貢献したいと思った。そのためにも、中国について勉強し、また中国を訪れたいと思う。そのような想いから、帰国後、中国語の勉強を始めた。まずは日常会話ができるように、できることから頑張りたい。

もうひとつは、自分の小ささだ。研修旅行を通じ、中国人はもちろん日本人含め、多くの人と交流することができた。大学では体育会に所属し、日々部活ばかり没頭している私にとって、様々なバックグラウンドを持った人との交流は、とても新鮮で、自分が無知で、いかに狭い世界・価値観の中で生きてきたかを知る機会となった。

中国で交流した大学生は、将来、自分に教育の機会を与えてくれた中国に恩返しできるように働きたいと言っていた。個人単位でしか将来を考えたことがない私は衝撃を受けた。

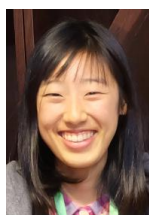
共に旅した日本人の仲間には、中国に留学し、中国語も堪能で、日中関係について真剣に考えている人、中国で書道を追究していた人、記者になる人、農業や狩猟をしている人、大学院で研究をしている人など、他にも挙げたらきりが無いほど、多様な立場の志が高い人々がいた。

今部活をひたすら頑張っているだけの私にとって、そのような仲間との交流は刺激的だった。将来私は何をしたいのか。この交流は、現在ばかりに目を向けていた私に、未来にもっと目を向ける契機を与えてくれた。そして、部活だけをして満足していた私に、もっといろいろな世界を知りたいと思わせてくれた。

「井の中の蛙、大海を知らず」中国に行く前の私の姿そのものを表す言葉だ。中国に関して何も知らなかった。縛られた価値観、固定概念の中で生きていた。中国での研修旅行は、ちっぽけな私の姿を、私に気づかせてくれた。これからは、この研修旅行を通して知ったこと、感じたことを忘れずに、胸に抱き、行動に移していく番だ。

今回、中国研修旅行に参加する機会を与えてくださった panda 杯関係者、研修旅行で知り合った中国や日本の仲間たちに、心から感謝しています。ありがとうございました。

東京外国語大学 国際社会学部 2年 吉崎晴香



今回は、めったにない貴重な体験のできた、とても思い出深い訪中となりました。私は、中国の首都・北京を訪れたことはなく、初めての体験でした。ちょうど私たちの訪中と被るようにしてPM2.5の赤色警報が出され、出国前はあまり行きたくない気持ちも多少なりともありました。本場のスモッグや現地の衛生状況などを生で体験して、逆に日本の良さに改めて気づく機会にもなりました。現地の大学生との交流を通しては、同じ目線でそれぞれの意見を率直に述べ合うことができ、面と向かったの交流の大切さをひしひしと感じました。また、普通は知り合うことのできないような、多くの重役の方々とも交流させていただくことができ、これから自分自身が日中関係を左右する人間になることの責任と、皆様から日中交流の架け橋として、期待していただいていることも強く感じました。この体験は、これからの自分の活動の大きな原動力となると思います。

そして、北京だけでなく、孔子の故郷・曲阜を訪れたことで、都会の雰囲気とは違う、文化的に価値が高く、それでいてどこかゆったりとした雰囲気も味わうことができました。歴史の中では、文化的に中国は日本の先を行っていることが多く、さまざまな時代で、中国を模倣したり、影響を強く受けていることが多いと思います。歴史問題で今なお大きな隔りがある日中間ですが、文化的な強い繋がりを十分に活かせば、これがお互いの関係の潤滑剤になるのではないかと思います。

また、今回の訪中団で得られた仲間との繋がりは、私の人生にとって、とても大きな収穫だと思います。普段生活しては、ほぼ確実に繋がることのないような方々と知り合い、いろいろなことを話し、それぞれの中国観、日本観を知ることができました。今回のこの素敵な繋がりを絶やさずに、切磋琢磨し、それぞれのフィールドで活躍しつつ、日中交流の場のどこかで出会うことを楽しみにしたいと思います。

今回の訪中を通して得られた想いを忘れず、今度は自分の足で歩いて、見て、聞いて、もっともっと

深く、中国を知りたいと強く感じました。日本と中国は、本当は長い付き合いなのに、多くの部分で表面的にしかお互いのことを理解していないと思います。私は、今回の訪中で、多くの若者と交流し、やはり一般の人々の力は関係改善に大きな力を発揮すると感じました。大学の講義で、日韓関係において、韓流ブームといった、民間の文化交流の促進によって、日韓関係の改善に至ったという資料を見たことがあります。日中関係も、日韓関係のように一般の人々の力を結集して、それで国全体を良い方向に動かすことができるのではないかと思います。例えば、日本のドラマやアニメ、漫画などは中国に広まり、人気になっていますが、日本で暮らしていて、中国のドラマやアニメや漫画などはあまり目にすることがないと思います。あえて探そうとしない限り、なかなか触れることが難しいものだと思いますが、こういったものを、少しずつでも発信できないか、ということ、訪中後の今、考えています。何か良い方法がないかと模索中です。

このように、今回の訪中は、私のこれからの行動の起爆剤になってくれるものとなっています。素晴らしい体験ができたこと、素晴らしい人々と素晴らしい関係を持てたこと、本当に嬉しく、感謝しています。貴重な体験をありがとうございました。

滋賀県立大学人間文化学部・地域文化学科 3年 古川裕樹



今回のパンダ杯研修旅行では、中国人民大学で人民大学や北京大学、清華大学などの学生らと「日中国民感情及びメディアの責任」と「日中旅行及び地方文化体験」などについて話し合うことができた。短い時間だったが、中国の学生が日本をどう思っているかを知ることができて有意義な時間だった。交流した中国の学生たちが日本のことをもっと知ろうとしてくれていることが嬉しかったし、彼らの知らない日本をもっと伝えたいと思った。

外文局では、雑誌『人民中国』を作っている現場を見学できたので嬉しかった。中国語の報道を日本語の記事に置き換えている様子など特に興味深かった（これから雑誌『人民中国』の記事を読む時は、この時の光景を思い出しながら読みたい）。

北京の空は昨年9月に訪れた時よりも大気汚染がひどかったが、三日ほど現地にいると不思議なことに慣れてしまった。北京の街でもスモッグがひどくない日もあってある。日本のメディアでは中国のPM2.5の問題が騒がれているが、実は日本でも昔、公害に悩まされていた時代があった。中国の大気汚染の問題も遅かれ早かれこれから解決していく問題だろう。

山東省の曲阜では、夜にカラオケに行って中国語の歌を歌うことができた。僕も含めてみんなノリノリで中国の曲を歌いまくった。（ただし白酒を飲んだ後だったので喉の調子はあまり良くなかったのがちょっと残念。）もしまた機会があれば、今回のパンダ杯のメンバーの人たちとカラオケに行きたい。旅行中はパンダ杯を受賞した他のメンバーと一緒に中国について話すことが出来たのが面白かった。他の方の作文を読ませてもらい、個人個人の「中国」に対する考えがあって興味深かった。

中国に行って、自ら積極的に行動することの大切さを感じた。パンダ杯の研修旅行中には、中国の学生たちと討論したり、外文局でスピーチしたりするなど、様々な貴重な体験ができた。いずれも日本では体験出来ないことばかりであり、このチャンスを与えて下さった皆さんに感謝したい。これからは、本を読むことに加えて、実際に中国で体験したことを元に、中国語や現代中国に関する理解を深め、周りにもっと中国のことを伝えていきたい。

学校法人名古屋石田学園 星城大学学修支援課 職員 山本勝巳



想像を絶する速度で成長する中国への警戒か、マスメディアが映し出す「中国」を見て、果たして中国に行きたいと思う人がいるのであろうか？ 訪中直前まで日本の対中国報道はネガティブな印象しか与えてくれない。このような状況下、高校生から社会人まで、全国各地から様々なバックグラウンドを持った「私達」は文字通り中国へ飛び込んだ。

私達は最初から仲が良かった訳ではない。全く知らない者同士だったが、同じ食事をし、同じ経験を積み上げる中で、相手を知り、共に学び合い・思いやるようになり、「友」となった。唯一の共通点は「中国に興味があった」恐らくこれだけだろう。だが、これだけあれば充分であった。

日中関係においても、同じ事が言えるのではないだろうか？ 複雑に考えるのではなく、シンプルに中国人と同じ食事をし、同じ経験を重ねれば、仲良くなれるのではないか。別に何も難しい事をする訳ではない。そう感じさせてくれる友（日本人、中国人）を得たのが今回 PANDA 杯訪中での最大の成果だ。

私は全国各地に戻った、この志ある若者達から、新たな日中関係が生まれる事を確信している。それだけのエネルギーを今回の訪中で蓄える事ができた。

東北大学 文学部中国文学 2年 木村麻莉子



この研修旅行は、史跡や景勝地を巡り、とても豪華なおもてなしを受け、一生忘れられない研修旅行となったが、一番印象に残ったのは現地の大学生との交流である。「国民感情とマスメディアの責任」という題目で討論をした時、メディアは正しい情報を伝えないといけない、という意見で一致した。討論の後訪れた中国人民抗日戦争記念館では、かつて日本がどれだけ中国に対してひどいことをしたか教えられた。最近、歴史の修正を画策する動きがあるが、事実は歪めてはいけないことを確かめ合った。そして、死者を悼む心が、現在の政治的な敵を憎む心にとって代わってはいけないこと、そして何より平和が大切であることを話し合った。帰り際もっと互いのことを知ろうと we-chat を交換した。

昨年、中国から約500万人の観光客が日本を訪れた。日本を訪れることで今の本当の日本を知って欲しいし、日本人達も、もっと中国を訪れて欲しい。特に若者による文化交流は両国の関係を安定化させる。

創価大学経済学部（通信教育部）4年 村上恵理



中国の真実をこの目で確かめたく、日々中国語の勉強をしてきました。

北京へ向かう飛行機の中で、私はノートにたくさんの疑問を書いて、到着を今か今かと待っていました。不安と期待で胸が苦しくなる中、ようやく北京に到着し、飛行機から降りた瞬間、私の心の靄は一気に晴れ渡りました。

言葉では説明しづらいですが、確かに私は北京が好きだと魂が喜んでいました。

現地の大学生と拙いながらも中国語でディスカッションができたこと、両者とも日中の平和を望んでいるという意見で一致したこと、現地で一生懸命日本語を勉強している学生の崇高な志…。私は一人日本人として、彼等に負けてはいられない、もっと勉強しなくては、と思いました。

現地の社員さんのお宅での心あたたまるおもてなし、初対面であるにもかかわらず、まるで家族のようにあたたかく迎えてくれた優しさ。

そのお心のひろさにも日本では感じたことがないものでただただ感動と感謝でいっぱいでした。

道端やお店での何気ないやりとりから生まれた友情も忘れられません。

中国と日本は言葉に尽くせないほどの深い歴史と絆があり、我々はその恩を返さなくてはと思いました。

彼等と共に語り、共に肩を組みながら歌い、共に平和を願った1日1日はなににも代え難い宝物です。北京のスマッグは、いわば成長の証です。

この先の発展した北京をスマッグの中に思い描くと、少し寂しいような嬉しいような複雑な気持ちになりました。

私は今の北京の街並みがたまらなく好きです。

今このときの北京の景色を見ることができ、光栄です。

我々の暗い歴史も、我々は明るい歴史をつくりなおすことができます。

その第一歩を見た気がしました。

これからも中日友好の架け橋になれるよう語学取得に尽力して参ります。

素晴らしい機会を、本当にありがとうございました。

岩手県立不來方高等学校 普通科外国語学系中国語コース2年 松坂茉留



私は今回、中国語が沢山話せる！とワクワクしていました。しかし、いざ話しかけると、聞き取れず、「何でもない」など言われ、会話が途切れてしまいました。また、「中国語せる？」と聞かれ、「少しだけなら…」という、それ以降、話しかけてもらえませんでした。本来はその時にアクションを取るべきだったのに、私はショックが大きく、何もせずに黙ってしまいました。自分から積極的にコミュニケーションをとろうとしなければ、相手も心を開いてくれないのだと感じました。この経験をこれから活かし、もっと中国語を勉強すること、わからないことをわからないままにしないようにしようと思いました。

日中学院 山崎 顕吾



今回の訪中では、行く先々で皆さまから歓待して頂き大変感謝しています。多くの中国の方と直に接し、交流ができたのが何よりの収穫です。そして、もう一つの大きな収穫は、お酒に対していくらか免疫力がついたことです。もともとお酒は飲めないのですが、勧められるままについつい飲んでしまいました。日本に帰ってからも練習してもっと飲めるように頑張ります。貴重な体験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

東京外国語大学国際社会学部 2年 鈴木洋晶



今回北京や山東省などを訪れ、今まで知らなかった中国の様々な部分に触れることができました。特に印象深かったのは、人民大学や曲阜師範大学での中国の大学生たちとの交流です。ディスカッションしたりゲームしたりして彼らと触れ合った時間はこの旅行一番

の収穫だと感じています。また、宴会や家庭訪問では単なるツアーでは知ることのできない中国の生活やしきたりを垣間見ることができました。今回このような機会を頂けたこと、本当に感謝しております。

中国美術学院書法系書法篆刻專業本科卒業 露木春那



『以書會友』、曲阜師範大学の交流会で地元学生と一緒に書いたこの四文字が今回の旅の思い出を代言しています。「中国文化を愛する気持ち」が私の背中を押して、まだ見たことのない、新しい世界を見せてくれます。7日間の滞在をサポートして下さった皆様から感謝いたします。近い将来、私自身も一人の芸術家として、日中友好の雰囲気を盛り上げる存在になれるよう奮励努力します。